

論 説

台北第三高等女学校における「短歌」修養

豊田 周子

はじめに

第1節 台湾女性のライティングと「短歌」

第2節 日本女子の教養とされた「現代短歌」

第3節 日本植民地教育を通じた短歌の伝播

1. 台湾における「現代短歌」の受容
2. 三高女の短歌教育

おわりに

(要約)

日本統治期台湾の「国語」教育では、日本文化の真髄を体得し得るものとして、短歌俳句など伝統文芸の創作が奨励された。ことに日本の植民地近代教育の影響を強く受けたとされる台湾女性のライティングには、しばしばその痕跡が認められる。はたして台湾女性文学において短歌創作は如何に位置づけられるのだろうか。本稿はこうした問いを明らかにすることを最終目標としつつ、そこに至るまでに彼女たちがどのような修養を経て来たのかを明らかにしようとするものである。本稿は、目下の所、史料が多く残る「台北第三高等女学校」の短歌教育に着目し、その教育の有り様や、生徒たちによる短歌の作例を検討するなかで、短歌という日本古来の文芸形式が植民地の台湾女子教育に取り込まれてゆく過程を考察する。そしてその体験が戦後の台湾女性歌人の自己形成と如何に結びついてゆくのかを考えてみたい。

はじめに

日本の植民地統治・支配下に置かれた地域では、皇民化政策に基づく国語教育のなかで日本語三十一文字による「短歌」の創作が重視され、日本語世代の台湾人の自己形成に少なからぬ影響を与えた。

本稿は日本統治期に台湾に移植された「短歌」¹と台湾女性の精神活動との関係について探求すべく、戦前において短歌教育が盛んであったとされる台北第三高等女学校（以下、三高女と略記）の修養の実態に着目する。戦後初期台湾女性文芸の空白について、台湾女性らによる精神活動を発掘し、台湾文学史に位置づけることを最終的な目標に据えながら²、本稿はそのための一つのステップとして、短歌という日本古来の文芸形式が如何なる目的により植民地の女子教育に取り込まれ、その後の台湾女性たちの自己形成に結びついていったのかを考えてみたい。

第1節 台湾女性のライティングと「短歌」

戦前の日本に生まれた台湾人女性作家・陳蕙貞（1932～2005）が、13歳の頃に書いた小説『漂浪の小羊』（1946、以下『漂浪』と略記）には、主人公の台湾少女が親を偲んで短歌や俳句を詠むシーンが出てくる³。本作品では、少女がこれらの日本語短詩文芸により自己の内面を表現す

る一方で、彼女の父親が漢詩により憂国の思いを表すなど、日中双方の伝統文芸形式によりジェンダーや親子の別が書き分けられている⁴。また日本統治期を代表する女性作家・辜鴻銘（1914～2000）の私小説『ながれ』（1942）の末尾にも、植民地の近代化教育を受けた台湾女性が短歌を詠む場面がある⁵。さらに、台湾共産党の創始者である謝雪紅（1901～70）も日常的に作歌していたとされる⁶。

これらのことに注目して、1940年前後の台湾女性のライティングを眺めてみると、「短歌」にまつわるエピソードが意外と多いことに気づかされる。この事実は、私的空間において、台湾女性たちが日本の短詩文芸を一定量書いていたことを物語るものだろう。しかしながら従来の台湾文学研究では、「白話小説」「口語自由詩」を中心とする近代文学に比して、台湾人による「短歌」については、古語を用いる文芸であるための扱いづらさや史料の残存状態などの問題から、研究の進展をみていないのが実状といえる。だが、日本文化のなかに古来より人々の生活とともにある短歌という鉱脈は、やはり台湾文学研究においても見過ごすべきではないと思われる。

では、はたして「短歌」とは、日本の植民地近代教育を経験した台湾の女性にとって、如何なる存在だったのだろうか。本論ではこの問いを探究するべく、まず日本「内地」で「女学生文化」が形成された1930年代に遡り、日本の教育を受けた女性にとっての「短歌」の意味を確認する。次いで、この短歌を用いた自己修養の文化が、1930年代の植民地統治下における台湾の女子教育に如何に影響を及ぼしたかを、三高女を例にとり検討してゆく。

第2節 日本女子の教養とされた「現代短歌」

戦前の日本内地の女学校と女学生の関係について考察した稲垣恭子は、女学校が増設されていった1920年から30年代頃にかけて、少女雑誌に代表される大衆モダン文化を取り込んだ「女学生文化」が花開いたと述べる。

稲垣は、30年代後半に行われた読書調査をもとに、小説を中心として各学年で8割を超える女学生が雑誌に掲載された小説を読んでいたこと⁷、また学年が上がるごとに、「少女小説」から「通俗小説」へ移行する傾向のあったことを指摘している⁸。また同時に、稲垣の示す資料から読み取れるのは、「小説」ほど人気ではないものの、1, 2年時（12・13歳）には皆無であった詩歌や随筆などのジャンルにおける読書体験が、5年時（16歳）には一割ほどに増えていることである。ここから、女学生の内面の成長が、彼女たちの読書傾向の変化、つまり詩歌への関心に表れていることが理解できるのである。

1920年代以降、「教養」教育を旨として拡充された女学校の生徒たちを中心に、文学を積極的に取り入れる「女学生文化」が全国的に広がっていった。他方、この種の教養教育は学校という学びの場のみならず、家庭において「習い事」としてもその修養が補完される傾向があった。

現代日本を代表する歌人・馬場あき子（1928～）は、1940年に、東京中野区にあった昭和高等女学校（現昭和女子大付属昭和高校）に入学しているが、当時を振り返り、日本の女性たちが教養として嗜んだ「現代短歌」について、次のように述べている。

山ざくら花散り果てし木の幹を静かに露の伝ひ居るかも／短歌を作っていた伯母の影響で、歌を作り始めたのは、女学校入学前。釣り好きの父と出かけたときに作った幼い歌を挙げておきましょう。／その頃の昭和高女は、映画や展覧か、博物館、舞台の見学が多く、文化を体験させてくれる学校でした。2年のとき、好きだった有職故実の発表「女房装束について」で優秀賞をもらいました。夏休みの感想文は島木赤彦歌集、つまらないと書いたけれど先生は評価してくれた。これが現代短歌と関わる第一歩でした⁹。

戦前の日本、それもとくに一定の文化水準を有する日本の家庭では、日本人女性が短歌をたしなむことは「教養」の一つととらえられていた。この馬場の言葉から推し量れば、40年代とかなれば、中上流階級の家庭では高等教育機関である女学校入学以前に、少女たちの身边にすでに短歌を作ることができる先輩女性たちがおり、少女たちの教養を下支えしたケースもあったものと思われる¹⁰。日本の少女たちが「現代短歌」に触れる機会はかくして、「女学生文化」と「家庭」という公私の空間を通じて獲得されていったのである。

それゆえ、馬場と同世代にあたる前述した『漂浪』の作者である1933年生まれの陳蕙貞の短歌の素養は、彼女が「内地」において五歳から堀江家に養女に出され、義理の母とその親戚の女性に育まれた所が大きいと考えられる。以上を踏まえてここで少し、陳蕙貞の『漂浪』に出てくる台湾少女が短歌や俳句を詠む場面を振り返ってみよう。

たとえば主人公・慧真が疎開した新潟の情景では、「近頃慧真は家恋しの心を俳句や和歌に表すようになった。自分で作った歌集にはもう大分たまっている。口ずさむと身は遠く雪国にあるとも、心は遥か離れた東京の我が家へ飛ぶのだった¹¹。」と描かれている。また彼女が勤労動員で山に薪を刈に行くゆく場面では、「慧真はポケットから手帳と、鉛筆を出し、手帳に頭に浮ぶ和歌を書き止めた。いつもこうして寮へ帰ってから、歌集に写すのである。東京の家に居る頃は余り歌も詠まなかったが、環境が変わればこうなるものかと思うほど、事ある毎に俳句や和歌が慧真の頭に浮かんで来るのだった¹²。」とある。

これらの描写からは、生活のなかで作歌作句活動がごく自然に遂行され、日本に暮らす台湾少女の内面を表す手段となり、少女の成長と不可分な関係となっていたことが理解できるのである。

第3節 日本植民地教育を通じた短歌の伝播

1. 台湾における「現代短歌」の受容

日本の伝統文芸として五七五七七の音律を刻む短歌は、古くは中国宋代の詞の影響を受け成立したとされ、明治以降に生じた日本の近代短歌は、留日した李叔同（1880～1942）の新詩など、五四知識人の作品にも少なからず影響を与えた¹³。このような所からは、中国の古典文芸の変容形態とも言える日本語短詩文芸は、中国文化圏の人間にとっても共鳴しやすい創作媒体であるとの見方もできるだろう。

では当時日本の植民地下にあった台湾において、短歌は如何に受容されたのだろうか。

戦後の台湾における短歌・俳句に関しては、すでに磯田一雄による研究の蓄積がある。

磯田によれば、日本統治期の台湾では代表的な歌誌『あらたま』(1922)や俳誌『ゆうかり』(1921)に知られるように、内地人による短詩文芸の結社が多くつくられたが¹⁴、これらの結社に所属していた台湾人は限られていた。しかしそのようなエリート文芸集団に属さずとも、中等学校の国語教育において短詩文芸の修養を受けた人々が相当数おり、それらの層が戦後台湾における日本語短詩文芸の「再生」をもたらしたのだという¹⁵。

台湾における台湾人による短歌や俳句の創作は、1920年代にはすでに行われており、1931年の満洲事変頃から活発になったとされる。台湾人が日本語による短歌や俳句を「受容」するようになった一因は、この時期の人々が、日本語短詩文芸の文学形式やその背後にある日本文化になじんできたこと、呉建堂（筆名は孤蓬萬里、1926～98）や呉濁流（1900～76）、また郭水潭（1908～95）が述べるように、漢詩の平仄や押韻についてゆくことのできない若者にとってはむしろ、短歌や俳句の形式の方が「取り付きやす」く、身近な出来事や生活の表現の道具として受け入れられていったという所にあった¹⁶。龍瑛宗（1911～1999）が述べるように、通っていた学校の国語教師に導かれて短歌の道に入ったというケースも少なくなかった¹⁷。

さらに、日本語短詩文芸の「表現対象の柔軟性」という点に着目すれば、漢詩が公的な場のものとして叙事性や政治性を好む文学形式であるのに対し、短歌や俳句は、日常の細々とした事物や人間の内面をリアリティに表現できる形式であるとの利点も見いだされるように思う。だとすれば、日本語が優勢言語となる植民地台湾において、現代短歌が受容されたのは、その形式が植民地という枠組みを強く意識することなく、「近代」という「個人」の内面の表出を重視する時代の要求に適っていたからだと解釈することも可能であろう。

磯田はまた、パトリシア・ツルミや植野弘子の考察に拠り、日本語短詩文芸の修得と出身階層や文化・教育の関連性について、「日本化」（「近代化」）は、当時の植民地台湾の台湾人社会のヒエラルキーのなかでも、上層部の人間が積極的に取り入れる傾向があり、高等女学校に進学する女性たちは、他の階層の男性よりも濃厚に「日本化」の教育を受けたと指摘する¹⁸。

このことを踏まえれば、当時の台湾で植民地の近代教育を受けた少女たちにとって「日本化」とは、日本「内地」の中上流階級の文化、すなわち「教養」と位置付けられた短歌や俳句など伝統的短詩文芸を身に着けることが重要な要素の一つであったとも言い換えられるだろう。

日本の正統文芸でありつつも、「たしなみ／教養」というニッチな側面を兼ね備えるがゆえに、短歌は、皇民化政策時期や戦時体制時期の強い政治的磁場のなかにあっても、少女たちが、かならずしも政治に直接関わらない日々の心情を記録しうる表現媒体となり得たのではなかろうか。

「読む」から「書く／詠む」営為へ、また「教えられる」立場から「創作」する立場へ、日本語三十一文字に自らの思考を収斂させる主体的行為を繰り返すなかで、台湾の少女たちの内面の成熟は深まり、やがて短歌は自身の存在証明のための不可欠な手段となっていく。本稿の目的は、その導入部において、どのような作歌活動がなされたのかをつまびらかにすることを目的とする。その一つの手がかりとして、次節では、日本統治期台湾における台湾女性の憧れの学び舎であった三高女の短歌修養を例にみてゆくこととする。

2. 三高女の短歌教育

「台北市立中山女子高級中学」の前身にあたる三高女は、周知のように、陳進（1907～98、第2期生、台湾初の女性画家）や李緞（1909～95、第6期生、台湾省婦女会理事長・政治家）、謝娥（1918～95、第12期生、台湾初の女性外科医）など、名だたる著名人を輩出した名門校である。

日本統治期の1897年に、台湾人女子の女子教育機関として「台湾総督府国語学校第一付属学校女子分教場」という名称で士林に開設されたのをその始まりとし、以降、「台湾総督府国語学校第一付属学校」（1898）、「台湾総督府国語学校附属女学校」（1910）を経て、「台湾公立女女子高等普通学校」（1919）となり、1922年には、四年生の高等女学校へと昇格して「台北州立台北第三高等女学校」（1922）に名を変える。22年に公布された「台湾教育令」により「日台共学」が開始されると日本人も入学可能となり¹⁹、23年には皇太子が巡視行幸するための「台湾女子教育状態御覧学校」に指定された。その後、中崙上埤頭（現中山区）の新校舎へ移転（1937）し、終戦後は「台湾省立台北第二女子中学校」と改称された²⁰。

三高女における短歌学習の一端は、新井淑子による三高女の教職経験者（日本人女性）へのインタビュー調査の結果に窺うことができる。それによれば、三高女は国語の時間が他の女学校に比して多く、就学期間中に台湾人の生徒たちに「立派な日本語」を身につけさせるために、言葉を磨く訓練となる作歌を必須科目にしたという²¹。また、1920年代までに同校にはすでに、文学的才能豊かな生徒が作歌するムードが醸成されていたとの記録もある²²。

三高女の短歌教育が、カリキュラムを超えた全学的行事となるまで隆盛をみたのは、何といっても第二代校長である小野正雄（1884～1976、三高女在職期間：1925～41）²³による所が大きかった。1937年に台湾民報社から出された『台湾人士名鑑』には小野正雄について次のように紹介されている。

明治十七年三月一日岡山県児島郡二生ル 明治三十八年三月岡山県師範学校ヲ卒業ス 同四十二年三月広島高等師範学校本科英語部ヲ修了シ 同年四月福井県師範学校訓導兼教諭ヲ振出しニ教育界ニ身ヲ投シ 大正三年四月熊本県第二師範学校教諭ヲ拝命ス 同六年四月京都府立京都高等女学校教諭ヨリ 大正九年十二月台湾総督府視学官ニ任命内務局学務課ニ在勤十三年十二月文教課ニ転勤十四年五月台北第三高等女学校長ニ榮転ス 昭和十二年勅任官ヲ以テ待遇セラル 氏ハ本島子女教育ニ貢献スル処多クソノ女子弟モ全島ニ普ク散在ス 趣味ハ短歌

また、台北第三高等女学校創立八十五周年記念『回憶録』に掲載された小野氏の墓碑に見られる父の名・清太郎²⁴の名前で、国立国会図書館のデジタルアーカイブで検索をかけると、『季のぬき穂』（吉備和歌会社、1916）や『垣内之かをり』（齋垣内歌会、1922）などの地方歌誌に小野清太郎の作が複数出てくる。あくまでも論者の推測の域をでないが、これが正雄の父であるならば、正雄の短歌の素養は父から受け継いだものと考えられ、そのような氏の背景が三高女の短歌

教育に少なからず影響している可能性も否定できない。

本稿では三高女生が詠んだ短歌を検討するにあたり、現段階で確認し得る、以下の「資料1～5」にあげた五つの資料により、1932年から43年にかけての様相をうかがうこととしたい。

資料1：『明治神宮献詠集』（1932～42）

資料2：『台北第三高等女学校創立満三十年記念誌（下）』（1933）²⁵

資料3：『台北第三高等女学校創立三十五周年記念誌』（『扶桑』特別号、1933）

資料4：『台北第三高等女学校新築移転記念録』（1938）

資料5：『扶桑』（三高女同窓会誌）（1939～1943）

さて同校では上述の小野校長時代に、皇室中心の思想を涵養するため、皇室が最も重視する和歌に習熟する必要があるとの教育方針のもとに、1926年より「歌会始（現・宮中歌会始）」の形式に倣い、約千人の生徒を講堂に集めた「勅題和歌披講会」²⁶が行なわれた【写真1】。以降、小野校長自らが率先して短歌を奨励し、日頃の成果のお披露目会の場を教学に取り入れ²⁷、年始一月に短歌会や談話会を開催する「勅題歌披講会」が慣例化されていった。



【写真1】：三高女第一回勅題歌披講会（1926年、題：河水清）²⁸

また1935年からは毎年「重陽節供歌会」も開催されるようになり、各学年や学級間においても選が競われた。そこで詠じられた生徒たちの歌はたとえば以下の様であった。

いたつきの吾子をもとれる母上の後ろ姿に涙覚ゆる	黄氏玉粧（四年松）
常ならば母に逆らふ我ながら遠くさり来てみ情に泣く	洪氏鴛鴦（三年梅）
父母の優しき愛に護られつ学び舎に通ふ有難き哉	陳氏玉雲（二年松）
もろこしの民の生業聞く度に君が恵みに涙こぼるゝ	郭陳氏幼（三年松） ²⁹

ここには重陽の節句の趣旨に併せて父母の長寿健康を祈る歌が認められる一方で、国家を親と見立て、その膝下に暮らす自らの幸運に思いを致すといった歌も詠まれている。

こうした同窓生間で切磋琢磨する修養は学内にとどまらず、対外的な挑戦として実践されていった。同校の「主要年中行事概覧」³⁰には、9月行事として明治神宮献詠が、また12月には歌会始詠進と記されている所から、小野校長時代にこの二大歌会への参加が全校を挙げての一大イベントと化していったことがわかる。こうした短歌の学外献詠祭への参加状況を、確認し得る範囲で概括すれば、以下の【表1～3】のようになる。

【表1】：学外献詠祭①——即位の礼奉祝歌・歌会始

西暦	和暦	献詠先	勅題	詠進歌数	選歌	『扶桑』抄録数	資料来源
1928	S3	勅題詠進・昭和天皇即位の礼奉祝	菊盛	126	無	不明	『台北第三高等女学校創立三十五周年記念誌』、60頁
1929	S4	勅題詠進・歌会始	田家朝	124			
1930	S5	勅題詠進・歌会始	海邊巖	166			
1931	S6	勅題詠進・歌会始	社頭雪	141			
1932	S7	勅題詠進・歌会始	曉鷗声	287			
1933	S8	勅題詠進・歌会始	朝海	375			
1940	S15	勅題詠進・歌会始	迎年祈年	不明	不明	19	『扶桑』55号（1940年2月25日、4頁）
1941	S16	勅題詠進・歌会始	漁村曙	不明		66	『扶桑』59号（1941年2月15日、68頁）
1942	S17	勅題詠進・歌会始	農村新年	610		44	『扶桑』65号（1943年3月5日、3.5頁）

たとえば、先述の三高女の「勅題歌披講会」は、1926年の歌会始に則り、その年の勅題「河水清」を題として開催されたのを始めとして慣例化された学内行事であった。その後、大正天皇の諒闇が明け、28年11月に昭和天皇の即位の礼が行なわれるにあたり、同校は「御大禮奉祝歌」の勅題「菊盛」に初めて126首の学生献詠を行い、翌月12月には新年歌会始の勅題「田家朝」へも124首を詠進し、以降はこの対外的実践も慣例化されることとなった³¹。現時点では、34年から39年までの六年間の確認ができていないが、「表1」からは同行事が40年代初めまで続けられていたことがわかる。

その詠進に際しては、「(略)時、処、位、勅題詠進の事は、時からいへば新年歌御会始といふめで度い時であり、処について申せば、宮中といふ、至尊のおはします所であるから、不敬無礼に亘らず、其の場合と場所にふさはしい莊重、上品な歌を詠まねばならぬ。更に身分相応の歌を奉ることが肝要である³²。」といった指導がなされていた。しかし三高女関連資料をみる限りでは、全国の猛者が集う同会での入選は叶わなかったようである。

【表2】：学外短歌献詠祭②——明治神宮献詠短歌大会（資料2）³³

西暦	和暦	輯	兼題	三高女献詠歌数	入選と種類	「学校献詠選歌」の部における三高女生の入選歌	作者	学年	献詠歌掲載頁
1931	S6	6・㉑	問虫	393	無				不明
1932	S7	7	兵嘗月	539	有（選歌）	足なみをそろへてかへるつはものを迎へて照らす月のさやけさ	林氏佩貞	四年生	281-304
1933	S8	8	秋田	515	有（選歌）	高砂の島にもあきはもとて小田にこかねのなみよすかな	陳氏美女	二年生	306-327
1934	S9	9	海上月	579	有（選歌）	わたつみの波のうねりをつつとくまなく照らす月の影かな	徐氏柳	不明	367-390
1935	S10	10	読書	531	有（選歌）	文よみて涙なかしぬ文字しらぬはゝのさひしさふかくおもひて	王氏櫻	不明	414-438
1936	S11	11	山紅葉	542 (130) *㉒	有（選歌）	故郷の山のもみちそのはるゝおし葉おくれるものたよりに	渡邊美津江	不明	
1937	S12	12	朝霧	416 (76)	有（選歌）	霧ふかく雲のうへにたちこめてまたさめやらぬあかつきのまち	周氏招治	不明	
1938	S13	13	軍馬	521	無				
1939	S14	14	軍艦	486 (1)	有（選歌）	わたつみの神も守りませ兵を乗せて出て征く我が軍艦	蘇雪子		
1940	S15	15・㉓	社頭祈世	639	有（佳作）	しみたてる木の間しつけき御社に御代を祈りてぬかつきまつる	土屋セツ子	不明	*㉓-1
1941	S16	16	農家	336	無	朝またき鳩の飛びかふみ社に世を祈らんとわれぬかつきぬ	傳氏素姿	不明	
1942	S17	17	国旗	518	無				*㉓-2

もう一つの年中行事である、明治天皇と昭憲皇太后の神霊を慰めることを目的とした「明治神宮献詠祭」へは、1931年よりおよそ十年間にわたり献詠が行われた。

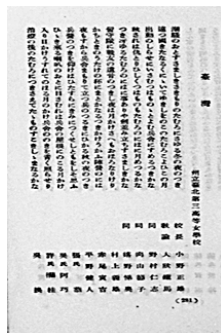
31年発刊の『明治神宮献詠歌集』に記された「明治神宮献詠会規則」³⁴によれば、同会は和歌を明治神宮大前に奉獻することを目的に、明治神宮社務所内に事務所が置かれ、会長一名、副会長二名、顧問、選者、幹事若手若干名によって運営された組織であった。

具体的には、会長を有馬良橘が、副会長を三室戸敬光と秋岡保治が務め、幹事を佐藤貢、別所猶一、多田徳三、大塚謙一郎、倉石正、山畑阿義夫が、顧問には入江為守（第三代御歌所所長）、上田萬年、金子堅太郎、三上参次、井上通泰（寄人）が配された。

また選者には、稲村真理、加藤義清（寄人）、掛布弓月、金子元臣（寄人）、北里闌、栗山直扶、佐々木信綱（寄人）、武島又次郎（寄人）、千葉胤明（寄人）、外山且昌（寄人）、遠山英一（寄人）、鳥野幸次（寄人）、額賀大直、長谷部親弘、山本行範というように、宮中で詠まれる歌の編纂撰述を担う御歌所寄人が多数参与した。当時の歌界の権威と目される佐々木信綱（1942年からは日本文学報国会短歌部会長）³⁵が、その選に関っている所からは、同献詠会と国家権力との結びつきが連想される。

一方、同会の趣意賛同者は誰でも短歌一首を詠進でき、毎年7月30日明治天皇祭の当日に当該年の兼題が発表され、9月末日までに詠進する必要があった。詠進歌は11月3日に神宮例祭当日に神前に奉奠され、そのなかから秀逸の歌数百首が選ばれ、同月6日大前にて披講式と表彰が行なわれた。これらは12月下旬頃に歌集として発行され希望者に配布された。32年からは、それまで区別なく配されていた一般献詠と学校献詠が分かれたて献詠集に掲載されるようになった。この学校献詠の参加校は、平均して毎年60校弱あり、尼僧や産婆の養成学校を含む女子校が七割弱を占めていた。また台湾からは三高女以外に台北州立基隆中学校が参加常連校であった。

【表2】にみえるように、三高女による同会への詠進は、1931年「聞虫」の兼題で、補習科から一年生までの生徒らによる390首あまりの献詠を行ったのが始まりだった³⁶。翌32年、「兵営月」【写真2】の題で全国から集まった7000数百首のうち、3560余首の「学校献詠」の部において、四年生の林氏珮貞（第9期生）の歌「足なみをそろへてかへるつはものを迎へて照らす月のさやけさ」が入選四首の一つに輝いた。



【写真2】：『明治神宮献詠集』（1932年、題：兵営の月）³⁷

さらに33年には、「秋田」の題で三高女から送られた515首のなかから、二年生の陳氏美女（第13期生）の歌「高砂の島にもあきはおとつれて小田にこかねのなみよすかな」が3700余首寄せられた学校献詠歌から、神前披露歌として予選を通過した七首の一つに選ばれた。この知らせを受けた三高女の教員生徒一同は大いに奮い立ったという³⁸。

三高女から同会への献詠は、1940年以降も続けられ、毎年500首にも及ぶ歌が奉じられた。同会に台湾から参加した高等女学校はほかに、台北第二高等学校、新竹高等女学校、基隆高等女学校、台南第二高等女学校、高雄高等女学校、屏東高等女学校があり、ここからも台湾各地の女子中等教育機関において短歌修養が重視されていたことが跡付けられる。そして三高女はそのなかでも、献詠祭への参加継続性や詠進歌数は圧倒的であり、また入選の上位を争う強豪校でもあった³⁹。

同会の兼題を眺めれば、30年代の「秋田」「海上月」「読書」「山紅葉」「朝霧」など牧歌的なテーマから、37年の盧溝橋事件を境に、「軍馬」「軍艦」「国旗」といった戦時色の濃い物々しい題が与えられてゆくことがわかる。それにつれて、「内地」の学校の入選が目立ち始め、三高女生の成績が振るわなくなってゆく点は興味深い。入選を逃した1942年の三高女の献詠歌の事例を、資料5の同窓会誌『扶桑』の抄録に拠っていくつか挙げてみよう⁴⁰。

兼題：「国旗」

マレージャワ遠きハワイの沖までも日の丸の旗輝きにけり 張氏素娥（四年）
大陸の城の辺にはためく日の丸に東亜の朝は明け初めにけり 邱氏連娣（三年）
満蒙の凍てつく如き大空に今日もはためく日の丸の旗 渡邊愛子（二年）⁴¹

日本人女学生の選歌には全体的に家族関係にも踏み込んだ切迫感や重みが伝わってくるものが多い⁴²。他方、三高女生の歌は、戦意高揚を詠う言葉は連ねられているものの、全体に情感に乏しい印象を禁じ得ない。あるいはこうした所が選に漏れた原因かもしれない。

【表3】：学外短歌献詠祭③——熱田神宮献詠会・靖国神社献詠会ほか⁴³

詠進年 西暦	詠進年 和暦	献詠先	兼題	詠進歌数	選歌	『扶桑』抄録数	資料来源
1935	S10	熱田神宮献詠祭	社頭祝	155	無	不明	『熱田神宮献詠集』（熱田神宮宮庁、1936年7月）
1936	S11	熱田神宮献詠祭	暁杜	81	無	不明	『熱田神宮献詠集』（熱田神宮宮庁、1937年5月）
1937	S12	靖国神社献詠祭	海上霞	114	無	不明	『靖国神社献詠集』第23回（靖国神社献詠会、1937年8月）
1937	S12	熱田神宮献詠祭	社頭池	78	1	不明	『熱田神宮献詠集』（熱田神宮宮庁、1938年4月）
1938	S13	熱田神宮献詠祭	軍国秋	105	無	不明	『熱田神宮献詠集』（熱田神宮宮庁、1938年12月）
1939	S14	熱田神宮献詠祭	海邊巖	137	無	12	『熱田神宮献詠集』（熱田神宮宮庁、1940年3月） 『扶桑』54号（1939年11月10日、11頁）
1940	S15	紀元二千六百年奉祝詠進歌	萬民祝	不明	不明	17	『扶桑』55号（1940年2月25日、13頁）
1940	S15	熱田神宮献詠歌祭	寄餞祝	115	無	無	『熱田神宮献詠集』（熱田神宮宮庁、1941年5月）

そのほかには「表3」のように、愛知県の熱田神宮献詠祭へも、百首前後の継続的な献詠が認められ、37年には兼題「社頭池」で同校生徒の郭氏月卿による「みやしろのやねをかすめてと

ふ鳩の影のうつれる池のおもかな」⁴⁴が入選した。また同年、戦没者の「みたままつり」の一環である「靖国神社献詠祭」へも詠進が行なわれ、全国から寄せられた三千首のなかから、同校の生徒 115 首が献詠集に掲載された⁴⁵。

以上見てきたように、三高女の短歌修養は、宮中や官弊社が主宰する格式高い献詠会への詠進、さらには入選を見据えた本格的なものであった。

三高女では「大和撫子」の養成を目的に、短歌修養のほかにも裁縫や日本舞踊などの教授も熱心に行われた。1931 年、皇居の御前で催される「勅題舞踊」に、宮内庁より台湾からの出演要請があった際に、総督府側は日本の舞踊は台湾人少女には習得不可能として三高女の出演を除外したことがあった。小野校長はこれに対して総督府に幾度も掛け合い、三高女の生徒の出演を説得し、猛特訓の末に日本人女学生が大多数を占める一高女・二高女を凌ぐ出色の舞踏を披露したという。このエピソードは卒業生のなかでも長く語り継がれているが⁴⁶、このように小野校長には三高女を「内地」の実力校に比肩する教育校に鍛え上げようとする強い信念となみなみならぬ熱意があった。各種献詠集に見える三高女生の歌の筆頭に、小野校長はじめ数人の教員の作が必ず掲載されていることから、教師と生徒が一丸となって物事に取り組む三高女教育スタイルが見て取れる。

かくして三高女の短歌教育は、小野校長の在職期間にあたる 1930 年代以降に、学校を挙げて創作活動に打ち込む隆盛期を迎えることとなった。

次に、三高女の在校生や卒業生の作歌修養の具体的な様相について、30 年代当時に刊行された三つの校史関連（「資料 2,3」）に沿って順に見てゆこう。まず、下に示した「資料 2」は、先述の「第一回披露会」で詠まれた生徒らの歌である。そのお題「河水清」は 1926 年の歌会始の勅題からとられているが、ここには、伊勢神宮にかかわる五十鈴川（②）や吉野川（③）のような日本有数の河川名のみならず、台湾の淡水（①）、馴染みのある溪流（④）、大屯の麓の小川（⑤）など各景勝地も詠いこまれている。春の柔らかな光に照らされた澄んだ溪流にあそぶ小魚の姿（⑦）などといった情景を詠じつつ、「御代の影」（①）「神代」（②）の語句を用いることで、自らの生きる環境が天皇陛下の御代にあることを意識した作歌（⑥）も認められる。

（資料 2）⁴⁷ 披露歌の作例—— 兼題：「河水清」

- | | |
|--------------------------------------|-----------|
| ① 淡水の河の水底すみにけり <u>栄ゆく御代の影</u> をうつして | 劉氏本子（卒業生） |
| ② 神代より流れ絶えせぬ五十鈴河万代かけて澄み渡るらん | 余氏良玉（四年） |
| ③ 春かすみ匂ふ <u>吉野の川水</u> は雪げながらに澄みわたるなり | 范氏湘妹（同上） |
| ④ 初日影照りそふ <u>島の溪流</u> に昔ながらの清水ながるゝ | 杜氏輕煙（四年） |
| ⑤ 大屯の麓の小川流れゆく清きおもてに初日照るらん | 蔣氏来春（二年） |
| ⑥ 朝日さす清き流も今日のみは <u>長閑けき御代</u> の春の調か | 陳氏阿素（一年） |
| ⑦ のどやかに初日の光照る川に魚の泳ぎも見えて嬉しき | 林氏秀琴（同上） |

次に「資料 3」には、1931 年 6 月 17 日の賀陽宮恒憲殿下（1900～1978）による台覧授業（③、

④）時に、張り詰める緊張のなか裁縫の授業が行われたこと（②）、当時台湾総督府文学長官であり「黒潮の歌とひろしの名」⁴⁸で知られていた下村宏（1875～1957、下倉海南）と生徒との間における歌の応酬（⑦）、また同校の特殊教育の一環として行われた「耐熱適応強行遠足」の記憶（①）や修学旅行先の「内地」におけるホームシック（⑥）など、三高女生の年中行事について詠んだものが認められる。

同資料には、短歌教育に携わった教員の思い出も載せられており、そこには短歌の伝統的な型を重んじながら、詠み手（生徒）の個性を失わないように腐心したこと、個人の実感を素直に歌いあげた生徒の作例として、同校の第一回勅題歌披講会に選出された汪劉氏本子の「青ければわれこゝにあり葡萄の実紫せん日家にかへらん」（⑤）を引きながら、粗削りで技巧に拘らない人を動かす力に溢れた歌心は『記紀・萬葉』に通じるものがあつたと当時を懐かしむ逸話も載せられている⁴⁹。このような事実からも、三高女の作歌教育の目指す所が理解されるように思う。

（資料3）⁵⁰ 『三五周年記念誌』における作例

- | | |
|--|------------|
| ① <u>湖口</u> ぞよ気を許すなと告げ給ふみこゑにいつか涙ながるゝ ⁵¹ | 高島キヨノ（補習科） |
| ② <u>一心に唯一心に針ぬけどふる</u> へる手にはぬく力なき | 王氏月容（四年） |
| ③ <u>台覧の誉を得たるこの衣</u> いや久しくも保たまほしき | 林氏淑子（同上） |
| ④ <u>鮮かに床に残れる宮様のお靴</u> の跡もなつかしきかな | 莊氏素娥（二年） |
| ⑤ <u>青ければわれこゝにあり葡萄の実紫せん日家にかへらん</u> | 汪劉氏本子（不明） |
| ⑥ <u>いねられぬ奈良の宿りの夜は更けてしかの音きけばふるさとこひし</u> | 蔡氏素女（不明） |
| ⑦ <u>今はとて岸をはなるゝくろ船</u> の行方しのびてぬらす袖かな | 連氏雫治（不明） |

次いで「資料4」は、同校の歴史上大きな転換期となった1937年の校舎移転改築に関する内容となる。すべての歌に「新校舎」に関わる用語が見とめられ、同題による全学的な作歌演習が行われたことがうかがわれる。ここには、七夕の日に学校総出で行われた引っ越し作業を経て（④）、新学舎で学ぶ生徒たちのはち切れんばかりの喜び（①、⑥）、校外の「三高女報国田圃」⁵²に浮かぶようにして立つ新校舎の姿（②、③）⁵³、校舎の美しさに少女たちが愛校心を募らせる様子（⑤）が読み込まれている。

（資料4）⁵⁴ 校舎移転改築時の作例

- | | |
|---------------------------------------|-----------|
| ① <u>新しきこの学び舎</u> にうつり来て喜びに満つ此の頃の我 | 蔡氏阿養（補習科） |
| ② <u>学び舎の窓辺に寄れば白さぎのいと</u> かるやかに田の面をとぶ | 王氏金梅（四年） |
| ③ <u>黄金なす田中に浮ぶ学びや</u> の雄々しき姿見るぞ嬉しき | 葉氏秀鸞（同上） |
| ④ <u>七夕のよき日に移る学び舎</u> の幸祈りつゝ祝ふ今日かな | 蔡氏美德（三年） |
| ⑤ <u>ひるがへるみ旗の下にまなびや</u> の行末長き幸祈るかな | 游氏満（二年） |
| ⑥ <u>美しき学びや仰ぐ乙女等</u> の面に漲ぎる希望の色よ | 施氏素筠（同上） |

そして生徒たちの日々の短歌修養の成果がよりまとまって見られるのが、「資料5」の同窓会誌『扶桑』である。日本国の異称を冠する『扶桑』は、小野校長着任の一年前、1924年（大正13年）3月20日に創刊号が発刊された。当初は同校の校友会と同窓会による共同の会誌として年一回発行されていたが、昭和になってからは同窓会が単独で「同窓会報」を発行し、1929年（昭和4年）より再びもとの共同体制に戻り隔月刊となった⁵⁵。同誌に設けられた「詞藻」や「歌壇」といった文芸欄には、一年生から四年生、補習科生⁵⁶、卒業生、さらには教員により詠まれた歌が数多く掲載された。管見の限りでは、1939年から43年の12号分だけで、じつに900首にも及ぶ歌を数えることができる⁵⁷。



【写真3】：『扶桑』第58号

先述の「勅題和歌披講会」や「重陽の節句の歌会」など恒例の学内行事や学外の短歌献詠祭において詠われたものを除くと、同誌に掲載された歌には（A）「卒入学」、（B）「教育理念」、（C）「修学旅行」、（D）「心身鍛錬」、（E）「日常風景」、（F）「戦時下の情景」といった五つのテーマが特徴的に認められる。以下、順にみてゆこう。

（A）「卒入学」

当時の台湾少女たちにとって憧れの学び舎である「三高女に合格した喜び」や「友との別れ」など卒入学にまつわるものは毎年のように掲載された。以下の作例のように、卒業については、師への学恩や同窓生との別れの辛さを詠ったもの（①、②）が、入学については合格の喜びと自分を育ててくれた家族への感謝の念を表すもの（③、④）が多くみられる。

日本統治下の台湾では、まともな中等教育を受けられたのは、1942年までに入学した世代であり、1943年から終戦にいたる臨戦体制期の学校は、学業はおろか勤労奉仕や学徒動員が授業に代わるものとなった⁵⁸。このことを踏まえれば、①の39年卒業生は短歌修養も含み三高女の黄金期の授業が受けられた世代、②の43年卒業生は授業は受けられつつも卒業後に「海遠く友と別れ」るなどして戦時体制への動員をやむなくされた世代、そして③、④の43年の入学生は、入学の喜びも束の間、学業自体がほとんど成立しなかった世代であると理解されるのである。

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------|
| ① <u>しかられて涙おとしし文机も今となりてはなつかしきかな</u> | 謝氏碧雲（卒業生） ⁵⁹ |
| ② <u>巢立つ日のせまれば悲し海遠くともと別れて旅ゆく我は</u> | 郭氏繡々（同上） ⁶⁰ |
| ③ <u>合格の知らせを受けて父母の笑ますを見つゝ涙流るゝ</u> | 車氏素蘭（一年） |
| ④ <u>発表を目指して急ぐ畦路の足もどかしくいららとする</u> | 謝氏麗英（同上） ⁶¹ |

（B）教育理念

生徒教養のための綱領に「誠実・礼儀・責任・奉仕」が唱われていた三高女では⁶²、厳格ながらも教員と生徒の双方が一体となった学修が行われた。そのような密な教育環境のもとに、卒業後も戦後も同窓会を通じて長くつづく、師弟の固い絆が培われていった。以下にみえるように、他界した恩師を偲んだり（①）、日常のなかで女学生時代の恩師の心に残る言葉を思い返したり（②）、当時国際的なソプラノ歌手として活躍したオペラ歌手・三浦環（1884～1946）を招いた独唱会を絶賛する作（③）などからは、教えを乞う人々を「師の君」と大切に敬い、来賓に礼を尽くす三高女気質の一端がうかがわれるように思う。

- | | |
|------------------------------------|------------------------|
| ① <u>夕されば匂ひ淋しき藤の花亡き師の君の姿しのばゆ</u> | 江氏珍（卒業生） |
| ② <u>折にふれさとし給ひし師の君のみ言葉深く胸に残れり</u> | 鄭氏明珠（同上） ⁶³ |
| ③ <u>せんだんの若葉の下に思ひい出ぬ優しき清き師の君の声</u> | 陳氏梅妹（三年） ⁶⁴ |

（C-1）「修学旅行（内地）」

小野校長の就任後、同校では、「内地」の風物や人情を体験するための教育改革が行なわれ、日本精神の涵養のため修学旅行も「内地」で行うことが奨励された⁶⁵。そのなかで詠われた作からは学習の場として、「厳島」（①）、「五十鈴川」（②）、「吉野」（③）、「富士」（④）、「夫婦岩」（⑤）、「樫原」（⑥）など皇室と縁の深い神宮や名所が踏まえられていたことが確かめられる。また「伊勢」や「奈良」など短歌の聖地巡礼を意識するかの旅程となっていることも注目される。

（C-2）「修学旅行（島内）」

- | | |
|-------------------------------------|------------------------|
| ① <u>山々に咲ける桜の厳島内外の人の集ふ春かな</u> | 林氏嬌（卒業生） |
| ② <u>五十鈴川清き流に群遊ぶ緋鯉真鯉の美しきかな</u> | 李氏祥杏（四年） ⁶⁶ |
| ③ <u>春雨はいつしかやみてみ吉野の梅の花にも露の宿れり</u> | 邱氏桜梅（同上） |
| ④ <u>静かなる富士を浮かべし蘆の湖に春陽のどかに輝き居れり</u> | 簡氏春梅（同上） |
| ⑤ <u>浦ちかく友とよりそひ眺むれば夕日に映ゆる夫婦岩かな</u> | 高氏清梅（同上） |
| ⑥ <u>樫原の大広前にぬかづきて祈り捧げし我等乙女子</u> | 古氏桜嬌（同上） ⁶⁷ |

他方、台湾島内の登山修学旅行歌も多数詠まれた。同行事は、小野校長肝いりの教育改革において新たに設置された行事だった。こうした歌のなかには、日月譚や烏来に暮らす原住民を詠んだ歌が少なくない。ここには、自分たちの平地の世界から隔絶した山の民が、狩猟をやめ農耕を行

い (①, ⑤)、日本式の名をもつ (⑥) までに同化が徹底されていることに対する驚き、部落でみた乙女らが奏でる杵つきの音や歌声の神秘性 (②)、入れ墨のない幼女の無垢な眼差しへの好感 (③)⁶⁸、従順に家事をするよう躰けられた子どもの姿 (⑦) など、オリエンタリズムを孕んだ眼差しで原住民をみつめる漢族女性の姿を感じ取ることができる。こうした視角は、39年に角板山の蕃童教育所を参観した際の生徒の記録にもうかがえ、原住民に対する当時の共通した印象であろうと思われる⁶⁹。

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------|
| ① そよ風に髪なびかせて山の子等鞭をふりつゝ牛おひてゆく | 陳氏素梅 (四年) ⁷⁰ |
| ② 湖の面にひゞける杵歌の調聴きいる旅の乙女ら | 陳氏宝玉 (同上) ⁷¹ |
| ③ 山深き里に育ちし童べの清き瞳よ永久にすめよかし | 莊氏玉 (補習科) |
| ④ 山深きこの里わにも日の本の教への道ぞゆき届き居り | 黃氏碧花 (同上) |
| ⑤ 人の世に交らぬ人の尊さよ汗にまみれて舐つくらす | 蘇氏玲善 (三年) ⁷² |
| ⑥ 日本名の門札の下に主らしき老いたる蕃人蹲り居り | 張氏月霞 (同上) |
| ⑦ 昼げたく <u>タイヤルの子</u> の横顔が忘れぬかな蕃社への旅 | 羅氏梅英 (一年) ⁷³ |

(D) 「心身鍛錬」

先述のように三高女では、全校教職員生徒が参加する「耐熱適応強行遠足」といった課外活動があった。暑さのなかでおこなうこの長距離遠足は、体力増強のほかに「大和撫子」としての精神力や忍耐力を鍛える目的があった (①)⁷⁴。校医の身体検査により、生徒が第一分隊 (体力優良組) と第二分隊 (体力普通組) に分けられ、歩行距離に差をつけて実施され、そのコースは主として、台北～基隆 (約 30km)、台北～淡水 (約 30km: ②, ④)、台北～桃園 (約 50km: ③) の三つがあった。

- | | |
|----------------------------------|-------------------------|
| ① 日の本の乙女ぞ強く生きてやはとはるけき道をふみ破りけり | 郭氏梅雪 (四年) |
| ② 三十二キロ北投につきし嬉しさに友と手を取り物語りあふ | 方氏錦秀 (三年) |
| ③ 鍛へ来し我等の健脚示んさ (ママ) と十三里の道恐れじと行く | 陳氏秀鳳 (二年) |
| ④ 萎えし足ひきづり行けば淡水の河にうつれる観音の山 | 黃氏秀齡 (同上) ⁷⁵ |

同様の目的から、大屯山、七星山、角板山など台北の山への登山も度々行われた (⑦, ⑧)。また 27 年に、第一回新高山 (現玉山) が挙行されたが、女学生による新高山登山は三高女が初めてであり、小野校長を団長とする教員と 14 名の生徒に加え、台湾総督府学務部からも同行者がいた。以降は年中行事となったが、東アジア最高峰の登山に参加できるのは成績優良品行方正かつ、上に見た「耐熱適応強行遠足」の体力検定に合格した生徒に限られたという⁷⁶ (⑤, ⑥)。

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| ⑤ 顔をめぐりて進む細徑の岩間に匂ふしやくなげの花 | 陳氏碧棠 (四年) |
| ⑥ 新高のみ山の奥は雨はれて梅の林に夕日かゞやく | 陳氏美蓮 (同上) ⁷⁷ |

- ⑦ 紅の山ぞしのばゆ常夏の島の山並もみぢまばらに 蔣氏梨雲（同上）
 ⑧ 友垣とたすけあひつゝ登るかなけはしく高き大屯の山 郭氏千晶（二年）⁷⁸

これも先に述べたが、三高女では裁縫の時間に洋裁・和裁・台裁などの指導が熱心に行われた。ことに大宮御所へ献上する刺繍を作成する際には、校長はじめ図案設計や刺繍指導の教員、選び抜かれた刺繍生とともに斎戒沐浴してから作業にあたるのが習わしだった。完成した作品は小野校長が宮中大宮御所へ奉納に行き、翌年に新たな作品と入れ替わりにして、旧年のものが下賜され（⑨、⑩、⑪）、同校の「光栄記念館」（現校史室）に保管された⁷⁹。

- ⑨ 大宮の下し給ひし御品をば島人とはに仰ぐ尊さ 文氏芳美（補習科）
 ⑩ み恵の刺繍の額を拜みてみ光のさす心地こそすれ 張氏月英（四年）
 ⑪ かしこくも 皇太后のおんめぐみ恭さに涙おぼゆる 葉氏文淑（一年）⁸⁰

（E）「日常風景」

生徒たちの目に映る季節の移ろいや（①、②）、「台湾の風俗」（③、④）、また短歌修養の課題への悩みなどが垣間見られる歌が随所に認められることは興味深い（⑤、⑥）。これらの歌からは、少なくとも43年7月まで同校で短歌教育が継けられていたことが推察される。

- ① 一日毎いかだかづらの木の下にわくらばまして秋のたけゆく 李氏綱（卒業生）
 ② 柿の木にからすの群のさやぎゐて秋陽しづかに照り添ひにけり 羅氏金英（同上）⁸¹
 ③ 賤の夫が心すさびに弾く胡弓流るゝ音の何かなつかし 鄭氏緞妹（補習科）
 ④ 水牛をひいて子等ゆく一本の赤土みちのはるかなるかな 曾氏秀媛（一年）⁸²
 ⑤ 宿題の和歌を作ると苦しみて白紙見つめてあくびするかな 小川紀久子（同上）
 ⑥ 和歌の句を思ひ出ださぬ悲しさよいつの間にやら時がすぎゆく 中山妙子（同上）⁸³

（F）「戦時下の情景」

一方、40年代に近づくと、あきらかに時局を反映した題材が取り上げられるようになった。戦意発揚に与するか否かの作もありながら、従軍看護婦に志願した先輩の身の上を案じる心理（①）、負傷兵を慰問し銃後の守りに努めようとする姿（②）、1941年真珠湾攻撃以来始まった防空訓練の様子（③）、戦火の逆巻く地に暮らす子を案じる母の心労（④）、戦争により我が子を失った親たち（⑤、⑥）、出征した恩師の無事を祈る心情（⑦）など、戦時下の台湾の情景とそこに暮らす人々の心象風景が細かに映しとられており、史料的价值を具えたものも多い。これらの歌からは、三高女の短歌教育が何よりも詠み手の実情を重んじ、かならずしも軍国主義一辺倒ではなかったことが理解できる。

- ① いたづきのますらをの為身を捨てゝいくさのにはに出でし姉君 邱氏金菊（三年）⁸⁴

- ② 国のためいたづく勇士慰めて銃後のつとめ共に果たさむ 林氏秀琴 (同上)⁸⁵
- ③ みんなみの星座きらめく夜の空にサーチライトの入り乱れたり 黄氏阿約 (同上)⁸⁶
- ④ 大陸にとつげる姉の上語る老母の面の淋しげに見ゆ 李氏綱 (卒業生)⁸⁷
- ⑤ 木の香高き護国神社に額づける老人の胸に遺族章輝やく 林氏秀琴 (補習科)
- ⑥ 健やかに育てし遺児に神にます父拜ませて拜む母あり 梅村貞子 (四年)⁸⁸
- ⑦ 晴の戦に出で給ふ雄々しき師の君なつかしや 陳氏玉娟 (同上)⁸⁹

以上見てきたように、三高女の教育が1930年代を全盛期とした短歌による修養を一つの軸に展開していたことは明白である。他の台湾における女子高等学校の関係史料にも短歌修養の跡は見受けられるものの⁹⁰、全学を挙げて行う修養の規模や組織性、また数量的にみても三高女は一頭地を抜いている。本論冒頭で述べた、三高女出の日本時代の数少ない台湾女性作家の一人である辜顔碧霞(第9期生)の小説『流れ』にも短歌が挟みこまれている事実は、同校の短歌教育が彼女の人生に根を下ろしていた証左とも言えるだろう。

一方、卒業後半世紀が過ぎた1997年に、特使看護助手として大陸に赴いた第18期生の洪鴛鴦(里洋子)が同窓会誌に寄せた記事からは、同校の教育に対する複雑な思いもみることができる。

(前略)

つくづく教育は恐ろしいと思う。三高女の教育で私はマインドコントロールされて従軍した。戦地で征服された民族の悲哀を目のあたりにする。

* 見せしめに窓に吊られし中国人の死体がゆらぐ終戦記念日

中日戦争は日本の侵略であったのは明らかなのにそれを認めない日本人がまだ居る。台湾人に対して一視同仁だと強調していたが三高女の狭き門を見てもそれは嘘である。大陸では私は常に冷静で共産主義に染まらなかった。人生を右往左往、七十年過ぎて来たが多くの知識を学び、青春の思い出一ぱいの三高女。この学校の卒業生である事は誇りであり、この学校で身に着けた短歌の素養は今も私の生活に欠かせない楽しみを支えてくれている

* 白帆浮く紺青の海兄惜しく藻屑と消えて今五十年忌 (以下略)⁹¹

厳格ながらも女子教育であることを配慮した細やかな指導や、教員と生徒が一体となり真摯に物事に取り組む教育方針により、三高女では他の女学校に比して卒業後も永く続く師弟の絆が生まれた⁹²。三高女の教育現場には、「皇民化」という言葉だけでは集約しきれない人間の交わりがあり、そのような経験のなかで身に着けた短歌が、自身の生涯にわたる存在証明の方法となっていたケースも少なくなかったのである。

『回憶九十年』、『光輝百年』、『扶桑』(戦後の部)、『雲水』など同校の代表的同窓会関連誌を翻けば、戦後に言語転換を迫られ、白色テロを経験し戒厳令が敷かれるなかでも、同校卒業生が日々の思いを短歌や俳句に昇華し続けていたことがよく分る。

そうした三高女出身の短歌創作の流れが、より大きな潮流に合わさるのが、同校第2期生を母

にもつ⁹³ 呉健堂（孤蓬萬里：1926～1998）が創刊した『台北歌壇』であり、その結晶としての『台湾万葉集』⁹⁴なのだろう。同書に歌が収められた三高女出卒業生は次の15名である⁹⁵。

【表4】：『台湾万葉集』とその続編にみる三高女出身者

順	名前	生年	卒業期（卒業年）	学歴・職歴
①	陳綱	1910	5期生（1928）	蓬萊公学校。
②	陳宝玉	1915	9期生（1932）	八柴蘭（現・士林）出身。士林公学校、三高女師範科。大安公学校・士林公学校に勤務。
③	王妹	1913	9期生	海山郡鶯歌庄石頭溪王厝出身。
④	黄娥	1915	9期生	台北市新起町二丁目（現・長沙街二段）出身。
⑤	吳煥	1915	9期生	台北州淡水郡水碓社（現・淡水鎮）出身。クリスチャン。
⑥	楊慧珠	1915	9期生	台北市上奎府町（現・建成区）出身。トレビアン洋裁学校。龜山公学校・蓬萊公学校に勤務。
⑦	林（陳）秋蟾	1915	9期生	新竹州大溪郡頭寮出身。東京留学経験あり。内柵公学校に勤務。
⑧	高淑英	1916	10期生（1933）	竜山公学校。
⑨	林佩貞	1916	10期生	深坑出身。公学校、昭和女子薬専。三井物産台北支店・台北市立仁愛病院など勤務。三高女時代に明治神宮奉納の勅題「兵營の月」の和歌に入選。
⑩	林麗蓉	1920	14期生（1937）	士林出身。景尾公学校、台北帝大付属病院産婆養成所に勤務。
⑪	藍玉娟	1923	17期生（1940）	羅東出身。羅東女子公学校。東京目黒DMG大学。大砲口頭法院に勤務。
⑫	陳益	1926	20期生（1943）	台北市大安区和平東路末出身。老松公学校。松山国民学校勤務。新高堂書店（現・東方出版社）で日本古書を扱う。
⑬	林彩雲	1927	21期生（1944）	台北市寿小学校、三高女教育専攻科、台北市立円山国民学校に勤務。三高女同期生の日本語文集『雲水』の編集責任者。
⑭	謝白雲	1928	22期生（1945）	台中州彰化郡北斗町（現・彰化県北斗鎮）出身。幼少期を東京で過ごす。台北師範女子講習科。トレビアン洋裁学校。洋裁の教師。クリスチャン。
⑮	楊麗珠	1928	22期生	林慧珠（9期生）の妹。台湾銀行に勤務。

この【表4】からは、卒業生の在籍期間が小野校長の三高女在任期間（1925～41）とその短歌教育の隆盛期にほぼ重なることがわかる。5期生の陳綱（①）を皮切りにして、9期生の会員が6名と最多を数えるが、たとえば、陳宝玉（②）は三高女の教員からも同校の白眉と目された才女であり、聯誼会においても短歌の名手として誉れ高い人物であった。彼女の呼びかけにより同歌会に参加した同窓生も幾人もいた。また林（陳）秋蟾（⑦）は戦後に歌集や句集を上梓しており⁹⁶、10期生の林佩貞（⑨）は先述の明治神宮献詠短歌大会の入選者（前掲「表2」参照）である。21期生の林彩雲（⑬）は、同期生のための日本語同窓会誌『雲水』の編集責任者を務めた人物であった。

1941年8月、小野校長の後を引き継ぎ台北第二師範学校校長の藤谷芳太郎（1892～？）⁹⁷が、三高女へ新校長として着任する。しかし以降の三高女の教育は徐々に戦時体制の影響をうけ、その状況下では同校の短歌修養は凋まざるをえなかったのだろう。同歌壇会員に三高女の最終期生となる26期生がみあたらないのは、そうした理由にもとづくものと思われる⁹⁸。

『台湾万葉集』に集う女性歌人は往々にして、子どもの巣立ちや退職、また身内の不幸など人生における大きな節目を経たのちに、同会に所属する友人に誘われ入会し、自身の再生を希求するように短歌を詠み始めるケースが少なくない。その歌は総じて、平易な言葉遣い、口語的、母恋の歌が多く、人物を中心とした動作性のある描写が認められるなど、三高女生の歌とも通底する特徴が指摘できる。その一方で、親の介護、父母・夫との別れ、姑や嫁との関係、子や孫への

慈しみなど、還暦を越え幾多の艱難辛苦を経た詠み手が紡ぎだす悲喜こもごもの思いは、日常づかいの言葉でありながら、年輪を経た樹木のように奥行きを湛えている⁹⁹。

もちろんここには、三高女出身者だけではなく、新竹州立高等女学校や台中第二高等女学校出身者、あるいは陳秀喜（1921～1991）のような公学校卒の学歴で、ほぼ独力で少女時代に培った日本語短詩文芸を素地にして、巫永福（1913～2008）らと「笠詩刊」を立ち上げ、戦後台湾の中国語現代詩を切り拓いた女性歌人もいる¹⁰⁰。

しかし本稿の目的は、三高女という一つの女子中等教育機関において、大規模になされた短歌修養／創作の様相を史料に基づき観察することを通じて、女学生時代に鍛えられた日本語による短歌創作が、戦後においても彼女たちの自己形成を深める術となった事実を明らかにする所にある。

おわりに

短歌は、植民地統治下の台湾で日本の植民地近代女子教育を受けた上流階級の台湾人女性にとって、「よき日本人」となるために「内地」人以上に必要な「教養」であった。そして、この教育を経て少女たちは、「大和文字」による文芸を身近な自己表現の方法として獲得していった。このように見てくると、先述した陳蕙貞『漂浪』にみえる在日台湾人少女が詠う短歌も、大日本帝国の擁する日本語文化圏にあまねく広がる「日本人」女性の「教養」という文脈に、大きく位置づけられるものと思う。

詩人・大岡信（1931～2017）は、『台湾万葉集』の序において次のように述べた。

総じて、台湾短歌には、短歌形式に遊ぶ楽しさがあり、機知、諧謔（かいぎゃく）があり、皮肉な眼差しがある。その皮肉は自分自身に向けられることも多く、そこに健やかなバランス感覚が働いて、わが人生を絶えず客観視する逞しさも感じられるのである。人生の受け止め方に余裕があり、それが、ある種の場合には、明るい諦観のようなものにまで達している。（略）生来身についた諧謔や辛辣な観察の短歌は、台湾短歌にきわめて普遍的に見いだせる特質であり、逆に日本の短歌にはきわめて乏しいものである¹⁰¹。

日本統治期の台湾では、日本語教育は植民地政策の一環として、現地の人々の言葉を奪う形で遂行された。日本が異民族の少女を「大和撫子」に仕立てるための手段として、三高女の短歌教育が行われたという歴史的事実を忘却することはできない。しかしその前提を踏まえたうえで、大岡の言葉は、台湾の短歌が「内地」発祥の大和文字による伝統文芸を脱して、台湾女性の自己表現の方法として独自の位置を獲得したことを示唆しているとも思われる。今後は三高女を軸としながら、彼女たちの短歌が戦後において如何に成熟し変容していったかについて分析を進めたいと思う。

【付記】

本稿は、科研費研究基盤（C）21K00334「東アジア女性による日本語詩歌創作とその主体性に関する研究——台湾と朝鮮を中心に」および台湾国家図書館・漢学研究中心「2023 年度外籍学人来台漢学研究奨助」による研究成果の一部である。

本研究遂行にあたりお力添えをいただいた、元漢学研究中心学術交流専門員の葉毅均博士、上記フェロー期間中に台湾大学台湾文学研究所において受け入れ教員となってくださった黄美娥教授と同研究所の皆様、三高女卒業生の方々に引き合わせくださった中央研究院台湾史研究所の詹素娟教授に心より感謝申し上げます。また複数回に亘るインタビューや資料提供に快く応じてくださった黄彬彬先生をはじめとする三高女卒業生の皆様、校史室参観をご快諾いただいた中山女子高級中学の張云榮校長先生と関係者の方々に篤くお礼申し上げます。関連資料収集等に際しては、台湾大学の高嘉謙先生、清華大学の王惠珍先生ならびに駒澤大学の趙偵宇先生より一方ならぬご協力をいただきました。

末尾ながら、拙稿へ貴重ご意見をいただいた査読者の方々へお礼申し上げます。

【参考文献】（本論に示したものは除く）

- ・曾文亮訪問／呉美慧・李思儀・林志晟記録『百年回眸：台北第三高女校友口述訪問紀錄』（中央研究院台湾史研究所、2023）
- ・台湾協会所蔵：台北第二高等女学校撫子会会報『なでしこ』（1979～2002）、台北第三高等女学校同窓会編『扶桑』（1985）、蘭陽高女同窓会会誌『蘭陽』（1988）、台北家政女学校同窓会白梅会本部編『白梅だより』（1988～2000）、新竹高等女学校同窓会編『同窓会だより』（1972～1989）

注

- 1 本稿の示す「短歌」とは、平安時代以降に定着した三十一文字による短詩文芸であるが、そのなかでも明治以降、定型句を排し自由や個性を求める変革を経た後の「近代（現代）短歌」を指すこととしたい。
- 2 本稿は、2020 台湾文学學會年度學術研討會における論者の報告発表「從『少女』到『女性』，以及作為此自我成長之方法的『短歌』——發掘戰後初期臺灣女性文藝」の内容に、台湾国家図書館・漢学研究中心が主宰する「2023 年度外籍学人来台漢学研究奨助」に採択され行った研究成果の一部を加えたものである。
- 3 たとえば、「紫にけぶる山端のおぼろ月そぞろに想う恋いし母かな」（復刻版『漂浪の小羊』（南天書局、2005、139 頁）、「病む身こそ越後の里に伏せれども心は遠く吾が母の上に」（同前書、154 頁）など。
- 4 梅家玲「台湾文学史外一章——『漂浪的小羊』（陳蕙貞『漂浪的小羊』国立台湾大学出版中心、2015）、1-13 頁。
- 5 たとえば、「春の野も荒野の果も笹舟の流れ行く身に何思はめや」（『ながれ』、原生林社、204 頁）。
- 6 陳芳明は、謝が獄中で自伝を書いたり、「和歌」をつくったりしたことは、彼女の精神活動が獄中でも中断されなかったことを雄弁に物語っていると述べる。（陳芳明著・森幹夫訳『謝雪紅・野の花は枯れず 楽土不凋雨夜花』社会評論社、1998、179 頁）。ただし楊克煌筆録・楊翠華編『謝雪紅口述／楊克煌筆録／我的半世紀』（楊翠華自費出版、1997）には該当する記述が見あたらなかったため、さらなる調査が俟たれる。
- 7 1935 年に東京市内の高等女学校で実施された読書調査。約 1300 名を対象に行われた。（稲垣恭子『女学校と女学生』中公新書、2007）、57 頁。
- 8 松本金壽・安積すみ江「女学校生徒に於ける課外読物の一調査」（『教育』4 巻 4 号、1936）により稲垣が作成した「表 1-5：女学生が読む現代文学の内容分類」を参照。当該表は 1936 に、東京・三重・愛知の高等女学校と実科高等女学校の生徒計 1616 名に対して行われた読書調査の結果である（前掲書・稲垣、66 頁）。1937 年に「東京・地方」で行われた文学読書体験の調査（稲垣、58 頁参照）においても、小説や戯曲が各学年で七割を超えている。
- 9 馬場あき子「語る一人生の贈りもの（5）」（『朝日新聞』2018 年 10 月 15 日、第 10 面）。以下、引用文の下線はすべて論者による。

- 10 作者の陳蕙貞も、育ての親である日本人の母親をはじめとし、その親族の女性から日本文学や「和歌」の薫陶を受けたと述べている。短歌や俳句の素養がある女性が身近にいる場合は、その「教養」教育の影響はなお強かったことだろう。『漂浪』では、主人公の少女が小学6年生の時に短歌や俳句を詠む場面が出てくる。
- 11 『漂浪』、139 頁。
- 12 『漂浪』、152 頁。
- 13 姜文清编译《日本近代和歌 400 首——从明治到昭和前期的日本和歌》云南人民出版社、2023 年 6 月、9 頁、段炳昌「序」。
- 14 日本統治期台湾における短歌結会を詳細に調査した研究に、頼衍宏『日本語時代の台湾短歌：結社を中心にした資料研究』（東京大学博士論文、2008）がある。
- 15 磯田一雄「戦後台湾俳句小史（一）戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌——生活表現の「日本化」・「近代化」——」（『成城文藝』239、成城大学文芸学部、2017）、2 頁。
- 16 前掲・磯田、8 頁。
- 17 龍瑛宗「萬葉集の思ひ出」（『台湾文芸』台湾文学奉公会、1944 年 5 月）、63、64 頁。
- 18 前掲・磯田、9 頁。
- 19 台北州立台北第三高等女学校に昇格した 1922 年在学中の最高学年を三高女第一期生として、翌年から入学年を基準に「期生」の称号を用いた。（黄彬彬「台北第三高等女学校物語」（中京大学先端共同研究機構社会科学研究所編・オンライン史料『記憶のアーカイブ』、2022、6 頁）。なお三高女在籍者に、タイヤル族出身のヤイツ・ベリヤ（1919 年卒、技術科第 9 期生）（台北第三高等女学校友誼会編『台北第三高等女学校 同学録』、2001 年、16 頁）をはじめとし、1922 年から 33 年までに原住民が五名、1923 年から 33 年までに「外国人（中国大陸出身者か）が複数名いる（台北第三高等女学校同窓会・校友会編『台北第三高等女学校創立三十五周年記念誌・扶桑第三十号記念出版』1933 年、5 頁）。／同資料は『日本植民地教育政策史料集成（台湾篇）』65 巻、龍溪書舎、2012 年）による。以下の脚注では同資料を『三十五周年記念誌』と略記する。
- 20 前掲・黄、13 頁。
- 21 新井淑子編『植民地台湾における高等女学校出身の女教師の実態と意識：アンケートと資料調査』（科学研究費研究成果報告書、1998）、610 頁。
- 22 「私は大正八年に赴任したので其の後の事しか存じませんが、赴任当時、已に生徒方の中に、特に文学的才能の豊かな才媛の甲乙が折に触れて作歌せらるゝ向きがあり、その多くが父母の膝下を離れて、家居別離の感に打たれ易い境遇にあらるゝ学寮の方に多かつたのは自然の事と思ひます。」（向山斧太郎「被講会の壮士と和歌添削の苦心」（前掲『三十五周年記念誌』、89 頁）。
- 23 台北新民報社編『台湾人士鑑』（日刊五週年記念出版 台湾新民報社、1937）、27 頁。小野氏については戦後台湾から引き揚げ、郷里の岡山県倉敷市に暮らしていたことまで分かっているが、その後の足跡については詳細不明。
- 24 台北第三高等女学校創立八十五周年記念『回憶録』（三高中校友聯誼会・第三高等女校八十五週年校慶紀念同学聯誼会、1982、135 頁）に掲載された小野校長の墓碑銘の写真には、以下の様にみえる：「正雄ハ清太郎長男岡山師範広島高等師範卒台湾総督視学官台北第三高等女学校長從四位勲四等勳任待遇資性進取闊達研究二富ム在台廿七年台湾子女、薰陶ニ献身女子教育、理想郷ヲ築ク昭和廿一年帰郷能ク家名、維持ニ努メ傍ヲ同高女ノ全国組織扶桑会ヲ創設其ノ遺徳内外 治シ昭和五十一年二月四日没行九十二歳」。
- 25 以下、『三十年記念誌』と略記。
- 26 「▼最初の勅題和歌披講会 大正一五年新年拜賀式訓話の際、「河水清」につき各一人一首以上の謹詠を全校生徒に命じ、歌稿二千余首より各学級一首宛を厳選し、同年一月十六日午後、宮中の御儀式に則り、発声、講頌、読師、講師、奉行を関係教官にて勤め、初めて勅題和歌披講式を挙げ、歌道講話の後、生徒選歌職員作歌を順次に披講した。爾来此の例に依り毎年開催することゝなつたが、式の形式は年々改善されて行つた。（前掲「台北第三高等女学校『三十年記念誌』『日本植民地教育政策史料集成（台湾篇）』64 巻、龍溪書舎、2012、158 頁）／加村きよゑ「最初の勅題和歌披講会の思出」「大正一五年一月六日第一回勅題和歌披講会が行はれることになりまして、先づ朗吟の節の研究を旧職員向山斧太郎先生が御研究せられる事になり、係の諸先生は幾度か練習されました。（略）当日の式は大体宮中歌御会始の御式に法つたもので、設備としては、講堂の壇上に卓子椅子を配置し、正面に会の順序を掲示され、向つて右方の高所に披講歌を大書されたものを掲げられました。役割は奉行は野村先生、読師及び発声は住江先生、講師は向山先生、講頌には赤尾先生と、江島先生と、守屋先生と私でした。（略）翌年は諒闇でこの会は取止めになり昭和三年からはすべて生徒で行はれることになりましたので、（略）」（同前書、481,482 頁）。
- 27 「二、訓育上の特殊施設 過渡時代の訓育方針であつた修身科に於て、国民精神殊に団体觀念の養成、作法の

重視、国語の練熟殊に話し方の習熟、思想感情の醇化、高尚なる情操及鑑賞力の涵養等は、其のまゝ之を踏襲してその徹底に力めたのは勿論であるが、時勢の進運は一層訓育の充実徹底を期する必要があるので、従来のものゝ外に種々の特殊施設を創始した。（略）1 国民精神涵養施設 皇室尊崇の観念は国民精神国家観念の根源なりとし、昭和三年十月 御写影拜戴の後には毎朝之を奉拜せしめ、朝会及訓話の際常に 三陛下並皇族方の御動静を告知し、重大なる事故ある時は遥拜又は台湾神社に祈願参拜せしむ。和歌は皇室の最も重ぜらるゝものゝ一であるから、当校亦之を重視し常に和歌に習熟せしめんことに力め新年歌会始御題は必ず全生徒に謹作せしめて其の優良なるものは詠進せしめ、又大正十五年より毎年一月勅題和歌披露会を開き、厳肅なる儀式によりて皇室中心の思想を涵養せんことに努め、昭和三年十一月御大典の記念として本館会場に光栄記念室を設け、（略）（『三十年記念誌』、157、158 頁）。

28 1926 年 1 月 16 日。国立台湾歴史博物館提供。

29 以上四首：「第五回重陽節供歌会」（『扶桑』54 号、1939 年 11 月 10 日、9 頁）。（ ）内の文字は、学年と学級を表す。

30 『三十五周年記念誌』、52 頁。

31 「▼最初の勅題詠進 昭和三年十一月、御即位の大礼を奉祝する者の為め、仰せ出されたる勅題「菊盛」の生徒詠進歌百二十六首を、宮内省御歌所宛に一括送付したのが、当校生徒詠進の最初である。同年十二月、昭和四年新年歌会始御題「田家朝」の生徒詠進歌百二十四首を、生徒各自の名に於て宮内省御歌所宛に発送し、爾来毎年之に倣ふことゝなつた。（前掲『三十年記念誌』、159 頁）。

32 嬉野悌興「勅題詠進歌について（抄）」（『扶桑』55 号、1940 年 2 月 25 日）、4 頁。

33 前掲『明治神宮献詠集』、1932 年～1942 年、国立国会図書館デジタルコレクション（2024 年 10 月 14 日閲覧）。以下表中の「*」について説明する。①：先述のとおり『三十年記念誌』には、1931 年（昭和 6 年）が同会への献詠の始まりと記されているが入選に関する情報はない。一方、同献詠集第 6 輯（1931）には、台湾からの献詠歌が多数確認されているものの、それ以降の輯のように一般献詠歌と学校献詠歌が区別されておらず、献詠者の所属も記されていない。そのため三高女生の作を特定できない。／②：（ ）内の数字は掲載歌数を表す。第 11 輯以降は、それまでのように献詠歌の全体ではなく、入選歌のみが掲載され、代わって選集末尾に附された「学校献詠一覧表」に各学校の生徒献詠数や選歌数の数量が記載された。ただしここでは入選と次点の数量のみで、佳作についてはカウントされていない。／③：15 輯は 16 頁から 25 頁分が落丁している。ただし、26 頁に三高女生二名の歌の記載が認められ、他の輯に照らして、当該箇所は「学生献詠歌佳作」の部にあたると思われるため、表には「入選」としてその二首を記すこととする。／④-1：抄録 38 首『扶桑』57 号（1940 年 10 月、10 頁）／④-2：抄録 44 首『扶桑』64 号（1942 年 12 月、50 頁）。

34 『明治神宮献詠集』第 6 輯、明治神宮社務所、1931 年頁。以降 42 年までの間、役員などに大きな変化はみられない。

35 玉井清「日本文学報国会結成に関する一考察——昭和戦時文壇統合をめぐる迷走について」（『法学研究』94 巻 9 号、慶応義塾大学法学研究会、2021）、16、17 頁。

36 「明治神宮へ献詠 本校は、明治神宮献詠歌会が毎年一回広く献詠歌を集めて之を明治神宮大前に奉奠し、以て不世出の歌聖明治天皇、並に昭憲皇太后二霊の神慮を慰め奉らんとする盛挙に共鳴し、今年九月始めて同会の兼題「聞蟲」について全校生徒に謹作せしめ、其の中補習科三二首、四年一一四首、三年六九首、二年九〇首、一年八八首、合計三九三首を選定して、九月二十三日同会宛発送した」（『第四章 本稿最近五箇年史』『三十五周年記念誌』、42 頁）。

37 明治神宮社務所編『兵営月』、明治神宮社務所、1932 年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1022763>（2025 年 4 月 22 日閲覧）

38 王陳美女「回憶」（台北第三高等女学校創校百年紀年誌『光輝百年』、三高女校友聯誼会「光輝百年」紀念編集委員会、1997）、157 頁。王陳美女は本科第 13 期生で補習科第 9 期生。

39 前掲『明治神宮献詠集』、1932 年～1942 年。「外地」の参加校に、関東州の旅順港等女学校、大連神明高等女学校、奉天高等女学校の名がみえ、いずれも日本人名による献詠歌である。

40 以下、生徒の作例に作者名を付すにあたり、姓氏改姓後の日本名である可能性もあることを付記しておく。たとえば第 59 号の通信欄には、「会員改姓名」の欄が設けられ、改姓名を本部に届け出た卒業生の情報が掲載されている（『扶桑』59 号、1941 年 2 月 15 日、15 頁）。現時点では旧姓と新姓を照合する術がないため、本稿では『扶桑』の表記のまま記述する。

41 以上三首：「国旗」（『扶桑』64 号、1942 年 12 月 25 日、5 頁）。

42 東京都三輪田高等女学校・中谷訓子「召されゆく父を送ると母の背におさなこかふる日の丸の旗」（『明治神宮献詠集』第 17 輯、1942、13 頁）

43 以下の表は、資料 2～5 に確認される記事を年代順に並べたものである。

- 44 『熱田神宮献詠集』、熱田神宮宮庁、1938 年、7 頁。
- 45 前掲・黄 (8 頁) には、1937 年の「海上霞」の兼題で詠進がなされ、全国から寄せられた約千首の歌のなかから、三高女の教員と生徒による計 120 首が選ばれ、第 13 期生から第 17 期生の四名の歌が入選して神前に奉納されたとあるが、論者の確認の限り、教員生徒による献歌 117 首は確認されたものの入選者はいなかった。引き続きの調査が俟たれる。
- 46 前掲・黄、17 頁。
- 47 ここに見える生徒の作は全 14 首あり、その一部を引用する (『三十年記念誌』、483 頁)。
- 48 向山斧太郎「被講会の創始と和歌添削の苦心」(前掲『三十五周年記念誌』、88 頁) の記述による。なお論者未見ながら、生駒實編『海の短歌集』(1940) に下村の作である「日のもとのみんなみのはしに吾たちてふりさけみれば黒潮をどる」が採録されているという。(川合英夫「海の短歌集」『日本海洋学会』、2007、315 頁)。
- 49 同前注の向山斧太郎の追憶による。
- 50 ここに見える生徒の作は全 11 首あり、その一部を引用する。(『三十五周年記念誌』、66、69、74、89、90、102 頁)
- 51 本作は三高女恒例の強行遠足(台北から新竹湖口までの 60km のルート)に際して、疲労困憊する生徒が教員から励まされた時の感激を詠んだもの。
- 52 「新校舎入居の頃校舎の前方にはまだ田圃が有りました。米を作るお百姓さんの苦労を体験させるため、勤労奉仕として学生達に田植え、除草、肥やし、稲刈りをさせました。(略) 将来主婦としても、公学校教師としても、物を大事に大切に使う、節約、儉約の習慣と、思いやりのある子供を養育するための教育の一環です。三高女報国田圃と名付けられた田圃です」(前掲・黄、23 頁)。なお、この「三高女報国田圃」の話は、『扶桑』61 号 (1941 年 12 月 20 日、6 頁) にも見える。
- 53 『扶桑』60 号、詞藻、1941 年 6 月 20 日、15 頁。
- 54 『台北第三高等女学校新築移転記念録』(1938)、201 ~ 209、211 ~ 219、222 頁。
- 55 「会誌「扶桑」の隔月発刊 従前吾が同窓会と学友会とは共有の会誌として年一回「扶桑」を発行して居たのであるが、こゝ三年間同窓会特別の必要から「同窓会報」を分離発行して来た。然るに両者は学校より見れば一幹連枝の同胞であつて、相互に理解もし連絡もとり、結束協力して校運の隆昌を期すべきものである。以上の見地から両者に共通の会誌が必要であるとなし、再び従前の「扶桑」に帰ることにしたのである。／加ふるに年一回の発行では、其の折々の清新な記事を読みえないといふ憾みがあつたので、今後は隔月に発行して学校の活動卒業生の同姓など相互に理解し合ひ、以て会誌発刊の趣旨に徹することゝし、尚必要に応じて臨時号又は別冊等をも発行することにした。」(「第四章 本校最近五箇年史」『三十五周年記念誌』、39 頁)。
- 56 1922 年、同校は台湾公立女子高等普通学校から台北州立台北第三高等女学校と改称される。それとともに、三年制から、台北第一高等女学校や台北第二高等女学校と同格の四年制の高等女学校となった。公学校の教員を養成する課程として、台湾公立女子高等普通学校時代から三年制終了後一年の修行を要とする師範科が設置されていたが、22 年の改称と同時に講習科に、28 年に補習科と改められた。以上は、前掲・黄 (6 頁)。また傅氏明珠「補習科に入学して」(『扶桑』56 号、1940 年 5 月 30 日、13 頁) を参照。
- 57 今回論者が閲覧できたのは 1939 年 ~ 1943 年にかけて発刊された、『扶桑』53 号 ~ 61 号 (58 号欠) ならびに 63 号 ~ 66 号の 13 号分 (62 号のみ未見)。これらは、論者私蔵の 58 号を除いて、「国立台湾図書館日治時期圖書影像系統」の映像資料 (jpli2014-pd-ccl_524_2205_6055) から確認した。
- 58 前掲・磯田、13 頁。
- 59 「別れに臨みて」(『扶桑』53 号、1939 年 4 月 30 日、11 頁)。
- 60 「巢立つ日を前に」(『扶桑』66 号、1943 年 7 月 25 日、6 頁)。
- 61 以上 2 首：「近詠」(『扶桑』66 号、1943 年 7 月 25 日、6 頁)。
- 62 『三十五周年記念誌』、50 頁。
- 63 以上二首：「四月兼題 旧師を思ふ」(『扶桑』53 号、1939 年 4 月 30 日、13 頁)。
- 64 「独唱会所感」(『扶桑』53 号、1939 年 4 月 30 日、13 頁)。
- 65 「国民的趣味は国民精神の貴重であるとの見解から、図書は日本書を学習せしめ、和歌の外に要目を設けて古典的民謡をも味はしめ、日本民謡調の歌曲を教授し又音楽会に和装出演せしめて和服の趣味を長じ、雛祭・端午・七夕・神社参拜の如き国民的行事に慣れしめ、特に昭和三年度より御大典記念として春季の内地修学旅行を創設し、内地の風物人情殊に桜咲く日本の気分を体験せしめる等、諸方面に亘つて国民的趣味の培養に苦心を重ねてきたのである。」(『三十年記念誌』、157、158 頁)。
- 66 以上二首：「内地に旅して」(『扶桑』53 号、1939 年 4 月 30 日、12 頁)。
- 67 以上四首：「内地に旅して」(『扶桑』56 号、1940 年 5 月 20 日、11 頁)。
- 68 陳氏秀 (補習科)「懐かしいウライの旅」(『扶桑』56 号、1940 年 5 月 20 日、12 頁)。

- 69 李氏明珠（補習科）「角板山蕃童教育所を訪ねて」（『扶桑』54号、1939年11月10日、10頁）には原住民の子どもたちがしっかりとした国語を話すこと、宿舍の清潔さ、炊事洗濯裁縫など日常生活の自律が徹底されていることへの感心と、それを指導する警察職員への賛辞が書かれている。
- 70 「中南部旅の歌」（『扶桑』55号、1939年4月30日、13頁）。
- 71 「中南部旅の歌」（『扶桑』56号、1940年5月20日、12頁）。
- 72 以上三首：「春季旅行の歌」（『扶桑』56号、1940年5月20日、13頁）。訪問先は烏来。
- 73 以上二首：「和歌」（『扶桑』61号、1941年12月20日、6頁）。
- 74 前掲・黄、20頁。また、台北第三高女校友聯誼会編『懷念 歌集』には、強行遠足等にしばしば一同が歌った小野校長・小谷野先生作詩・赤尾先生作曲の歌「台湾樂しや」が紹介されている。：「一、揺れる光だ 緑の風だ／南風（みなみ）その吹きや 豊かな穂波／米は二度生（な）る 甘蔗は伸びる／名さえ蓬莱宝島／台湾樂しや 良い所 二、茂る梢だ 雲呼ぶ山だ／柏（かしわ）交えて 阿里山檜／樟（くす）の香に 小鳥の歌に／山で斧振りや 氣も晴れる／台湾樂しや 良い所 三、招く南だ珊瑚の海だ／島で育てば 海こそ我が家／椰子の港に 出船の旗を／翳（かざ）しゃ血も沸く 腕も鳴る／台湾樂しや 良い所」（『懷念』、2004、214,215頁）。
- 75 以上四首：「強行遠足和歌」（『扶桑』60号、詞藻、1941年6月20日、15頁）。
- 76 前掲・黄、20,21頁。
- 77 以上二首：「新高登山の歌」（『扶桑』54号、1939年11月10日、10頁）。
- 78 以上二首：「奉祝登山」（『扶桑』55号、1940年2月25日、13頁）。
- 79 前掲・黄、18頁。
- 80 以上三首：「恩賜の額を拜して」（『扶桑』54号、1939年11月10日、11頁）。
- 81 以上二首：「十一月兼題 秋深し」（『扶桑』58号、歌壇、1940年12月15日、14頁）。
- 82 以上二首：「和歌」（『扶桑』61号、1941年12月20日、6頁）。
- 83 以上二首：「近詠」（『扶桑』66号、1943年7月25日、6頁）。
- 84 「従軍看護婦を送る」（『扶桑』54号、1939年11月10日、11頁）。
- 85 「白衣の勇士慰問の歌」（『扶桑』56号、1940年5月20日、13頁）。
- 86 「和歌」（『扶桑』61号、1941年12月20日、6頁）。
- 87 「二月兼題 自由題」（『扶桑』63号、1942年7月4日、6頁）。
- 88 「護国神社の英靈に捧げまつる歌」（『扶桑』63号、1942年7月4日、6頁）。
- 89 「明神先生を送る」（『扶桑』65号、1943年3月5日、4頁）。
- 90 同時代の台湾の高等女学校の短歌教育をうかがうための史料として、彰化高等女学校同窓会編『会誌』（1935）、私立台北女子高等学院校友会編『あさひかづら』（1936）、台北第二高女撫子会編『台北州立台北第二高等女学校のあゆみ 遠き学び舎』（1994）などが挙げられる。
- 91 「回顧」台北第三高等女学校創校百年紀年誌『光輝百年』、三高女校友聯誼会「光輝百年」紀念編集委員会、1997、197頁）。この引用部分の前に、洪氏の従軍中に愛する兄が高千穂丸で帰らぬ人となったことが書かれている。
- 92 前掲・黄（25、26頁）のほか、各種同窓会資料に繰り返される所にも明らかである。論者が三高女の第26期生（1946年4月入学、最終学年）の方々を中心に行ったインタビューにおいても同様の話をうかがった（インタビュー実施日：2023年9月20日、於台北中山北路）。
- 93 孤蓬万里の母親にあたる呉潘秋は三高女の第2期生にあたる。（「女権先駆」、台北第三高等女学校創校百年紀年誌『光輝百年』、三高女校友聯誼会「光輝百年」紀念編集委員会、1997、87頁）。
- 94 孤蓬万里編『台湾万葉集』（集英社、1994）、『台湾万葉集（続編）』（集英社、1995）。
- 95 この二冊に収められたプロフィールが明らかな約50名の台湾女性歌人のうち、三高女卒業生は以下の表のとおり15名が確認される。また呉健堂の記述によれば、三高女出身の『台北歌壇』会員は26名を数え、25期生までが在籍していたという（前掲『台湾万葉集』、51頁）。
- 96 陳秋蟾『ひとりごと』（孤蓬万里校閲、台北歌壇叢書、1978）、『日日草』（台北歌壇叢書、1983）、また陳秋蟾・陳昭仁著『木犀』（私家版、1989）。なお『木犀』には、同句集作成にあたり、表中にみえる陳宝玉や謝雲彩といった三高女卒業生の協力を得たことが記されている。
- 97 愛知県出身。三高女の校長着任前に台北第二師範学校の校長を務める。一宮女子短期大学名誉教授。歌集に『流転』（黄鷗叢書第十編、1975）がある。
- 98 前掲・黄（8頁）には、26期生であった著者自身の学校生活体験が詳しく書かれている。
- 99 この点について、論者は前掲の「從『少女』到『女性』、以及作為此自我成長之方法的『短歌』（2020 台灣文

學學會年度學術研討會)の報告発表において基礎的な考察を行ったことがある。

- 100 詳細は、拙論「陳秀喜の歌をたずねて——歌誌『山の辺』寄稿歌にみる戦後台・日・韓交流の様相」(『中國學志』蹇号、大阪公立大学中国学会、2025年3月、1～31頁)また、「資料紹介『陳秀喜の日本語短詩文芸について』」(『名城大学外国語学部紀要』vol.8、2025年3月、1～17頁)を参照されたい。
- 101 大岡信「序」(前掲『台湾万葉集』)、5,6頁。

(2024年10月15日投稿受理、2025年4月20日採用決定)